

自己評価 令和 7 年度 赤坂台こども園

テーマ「よく見て、よく考えて、なんでもする子」

「たのしいな」

0・1歳の目標・ねらい

- 野外で過ごすことを楽しむ
- 気候の変化や季節の移り変わりを感じる
- 運動機能の発達を促す

0歳児(もも組) テーマ「五感」

公園の草の上を歩き草の感触を味わい、吹く風を感じたり、戸外で過ごす気持ちよさを経験した。四季を通して草花や虫など、身近な自然物に触れたり匂ったり、夏場は水に触れるだけではなく、小麦粉ねんどや片栗粉遊びをして、その感触を味わえるようにした。冬は、戸外に出て寒さを感じたり氷が出来ると触れて冷たさを感じたりした。身近な自然の中で、「五感」を感じられる事を意識して保育を行った。

子どもは、戸外ではダンゴムシやアリ等、動くものに興味を示して怖がることなく自分から触れようとする姿が多く見られた。葉っぱや花を見つけると指差しだけではなく「あっ あっ！」と声を出して保育者に伝えていた。発見したものを、保育者と一緒に集めたり花などは鼻に近づけて匂ったりもした。虫食いの穴が開いた葉っぱで「いないいないばあー」を保育者がするとそれを真似たり、木の陰に隠れてかくれんぼを楽しむこともした。

保育者は子どもの虫などに触れる初めての経験には、「大丈夫だよ」と優しく声を掛けながら保育者自身が先に触れ、触れる姿を見せるようにした。何でも口に入れてしまう年齢でもあるので、遊びで使うものなどを誤飲しないように十分注意して見守った。戸外で感じる風や匂い等、経験する子どもの思いを汲み取り、共感し保育者が言葉で返して子どもに伝える事で真似てそれを言う単語が増えた。

戸外での散策では、歩きたい気持ちに寄り添いながら、体全体で戸外を感じられるようにした。しかし活動場所によっては安全面を考慮し、怪我の無いように見守る事を重視してしまい、動きを静止してしまうことがあった。寒くなると、体調を配慮したがゆえに、戸外に出る機会が少なくなり、外に出たい気持ちを我慢させていたように思う。

1歳児(たんぽぽ組) テーマ「これなあに！」

1歳児は、自分という自我が出てくる一方で、まわりの人や物にも興味が出てくる年齢なので、この1年間は自然遊びの中で散策や発見を楽しみ、子どもが興味・関心を持ち、五感を使って感じる事ができるよう取り組んだ。

戸外や園外に出た時に、自然に触れられるように同じ場所だけではなく、様々な場所に行き、五感を使って楽しめる活動を意識的に取り入れた。見つけた自然物や生き物を観察したり、匂いを嗅いだり、風や雨、鳥の声、乗り物の音を聴くなども楽しめるようにした。集めてきた自然物を容器に入れて遊んだり、園の畑の野菜を見るだけではなく、触るなどの体験が出来るようにした。散策して興味を持ったものを自ら触れるようにしたり、散策範囲や関心を持つものが広がるように成長に合わせた遊びを取り入れるようにした。

低月齢児が多かったので、反応にも個人差があり、初めは保育者からの働きかけで興味を示したり、経験したりする事が多かったが、遊びを通して散策をする、興味を持つ、触れる、感じるという経験を積み重ねていく事で、自分から進んで楽しむ様子が見られるようになった。全員の歩行が安定し散策にも興味を持ち始めると活動範囲が広がり、さらに発見したり、触れたり感じたりする姿に変わっていった。見つけたものを単語で言えるようになり、保育者や友だちにそれを伝え、発見を一緒に楽しめるようになった。

保育者の援助として、様々な自然に触れられる機会を多く作り、まずは保育者が見つけたものを子どもと一緒に感じて楽しむことが出来る環境を準備した。また五感を使うという事が分かるように、見る、聞く、匂う、触るなどをやって見せながら、言葉でも伝えたり、道具を用意したりと遊びを楽しめるように工夫した。年度後半には、子どもが自分で散策して物を見つけたり、興味を持ったもの、やってみたことに共感し、出来たことは一緒に喜び、認めていく事で、子ども発信で楽しめるように意識して取り組んだ。

1年間の取り組みを行ってみて、1才児としては自分で気付いて興味を持つようにするために、どのように働きかけ、経験が出来るようにするかを試行錯誤した。前半は保育者の援助や工夫で経験を積むことで、子ども自身が興味関心を持てるようにしたが、もっと色々な物に触れられるように種類を工夫したり出来たのではないかと思った。五感を使って感覚を養うために、どう経験をしていくかを考え進めたが、保育者のアイデアや工夫を出すのが難しかったと感じた。

2, 3歳の目標・ねらい

- 環境の変化に気づき、興味や関心を持つ
- 体力の増進を図る

ひまわり(2歳児) テーマ「生きもの」

赤坂公園へ散策に出かけ、友だちや保育者と一緒に虫探しをした。落ち葉や土を除けてダンゴムシやアリなどを見つけたり、虫取り網でバッタやトンボなどを捕まえた。手の平に乗せたり飼育ケースの中に入れ友だちや保育者と一緒にじっくり観察した。観察した後は、元の場所へ戻した。絵本やミニ図鑑も活用し、見た虫や知っている生きものを友だちや保育者に知らせたりもした。生きものと一緒の気持ちになろうと落ち葉が入ったトコ箱の中に入ってみたり、その中の落ち葉を触ったりした。ピアノの音に合わせてアリ、ダンゴムシ、蝶々、カエルなどになりきって表現遊びをした。

初めは虫を怖がっていた子どもだったが、少しずつ慣れると保育者と一緒に探したり観察したりと興味を持てるようになった。色や形などの不思議さを感じ、触れることで感触や虫を扱う力加減を知った。観察した後は元の場所へ戻すことで「またきてね」「ありがとう」という言葉が自然と出てきて、愛情や思いやりの気持ちを持った。実際に生きものに触れたことで、絵本やミニ図鑑に載っている写真にも一層興味を持つことが出来、他の生きものにも目を向けられた。落ち葉が入ったトコ箱に入ってみることでカシャカシャとした音や感触を体全体で感じ、虫の気持ちを少し感じることも出来た。表現遊びで体を動かし、虫になりきる楽しさや面白さも友だちとすることが出来た。

保育者の援助としては気候の良い時は積極的に園外散策へ出かける機会を持つようにした。虫を怖がる子どもには、保育者の手の平に乗せたり飼育ケースに入れたりして、徐々に近づけるようにし安心して観察出来るようにした。保育者自身が積極的に虫を探したり、捕まえた虫についても子どもの気づきや驚きに共感し、特徴についても子どもたちにもわかりやすく伝えることで、興味や関心を持てるようにした。生きものカードを用意し、名前だけではなく特徴などもわかりやすく伝え、ピアノの音で高さや強弱でイメージしやすくしたことで、自由に体を動かして、なりきって表現する楽しさを感じられるようにした。

絵本やミニ図鑑で見たことがある虫を見つけると、指をさして嬉しそうに知らせる姿が見られ、その都度共感していくようにしたが、もう少しゆっくりと一緒に見る時間を持つようにし、さらに関心を深めていけるようにした方が良かった。また、本の種類なども考慮する必要があった。季節が進んでいくと生き物が見つけられなくなるので、興味や関心が継続できるように遊びを取り入れていくようにする必要があった。

3歳児(ばら組) テーマ「草花」

園外散策に行く機会を多く作り、保育者や友だちと一緒に様々な草花を探して自然と多く触れ合えるようにした。また、観察場所を毎回同じにするのではなく散策場所を変えたり、見つけた草花は絵本や図鑑で名前を調べるようにした。見つけた草の匂いを嗅ぎ感触を楽しみ、季節によって草花の色や形の違いを知る事が出来た。草花を使って製作遊びを行い、自然に多く触れられるようにした。

園外散策で様々な草花に触れる事で、子どもたちから「こんな形の草見つけた」など子どもが自分で発見する楽しさを感じ、それについて会話を楽しみ保育者と友だちと共有する事が出来た。見つけた葉っぱは季節によって色が違うことからその色を見て季節の変わり目に気付く、秋ごろにはどんぐりの色や形を見比べ、その発見を友だちや保育者に伝える姿もあった。花を植えて観察するだけでなく交代で水やり当番をし、責任を持って世話をすることでより興味を持って生長を楽しみにした。

保育者は園外散策では色々な草花を見つけられるように散策が多く出来る場所へ行き、形や色、大きさの違いを感じられるような言葉掛けを行った。また、絵本や図鑑を多く取り入れて子ども達の知りたいという気持ちを引き出せるようにした。畑では野菜を植えて観察する機会を多く作り、雑草抜きも作物の生長に必要という話をし、草抜きを行う時間を多く持つ事で子ども達は野菜の生長にも興味を持ち収穫も楽しんだ。

遊びが進むと子ども達が自然の気づきや発見を友だちみんなで共有し会話を楽しむ事で、より自然への興味を示す姿があった。花を植えることで観察を身近で感じられるようにしたが、種が発芽せず、その後苗を植え成長を観察するなどしたが、順調にできなかったこともあり、楽しみにしていた子どもは残念そうにしていた。原因を追究する事で次回の観察に生かせればと思う。でき上った野菜が小さかったので、間引く間隔の認識もしっかりする必要があった。

4, 5歳の目標・ねらい

- 自発的に活動しようとする
- 状況に適応できるようになる
- 身体的バランス能力を育む

4 歳児(あやめ組) テーマ「葉っぱとなかよし」

1 年を通して、身近な葉っぱを観察することで四季の変化に気付けるようにした。また、見つけた自然物を使って遊びこめるように、どんな遊びをするのかを話し合う機会を持ち、考えたり、発言したり、グループで活動したり、協調性が育つように取り組んだ。

遊びの内容としては、色々な葉っぱを見つけて持ち帰り、観察することで、形や感触の違い、色の変化を見つけた。「大きい」「小さい」「細い」「小さい」などの大きさや色の特徴を具体的に伝え、「〇枚見つけた」と数も意識出来るようにもした。また、自然物を使った遊びを繰り返すことで、見立て遊びが上手になってきた。遊びの準備も子ども同士で行うことで、最初は戸惑ったり、言葉が足らず協力出来ていない姿があったが、遊びを繰り返すことで、友だちへの声の掛け方も上手になっていた。赤坂公園では、日陰、日なたの場所での葉っぱの生長の違いにも気付く事ができ、見つけたことを友だち同士で教え合うようになった。

保育者の援助としては木や育てている花や野菜の葉など、様々な葉に関心が持てるようにし、見つけた葉は、室内に飾り、いつでも観察できるようにしたり、遊びに使えるように環境設定した。園外に行った後は、必ず振り返りの時間を作り、見つけた事や疑問に思ったことなどを話し合うようにした。また、子どもの提案を聞きながら、遊びが広がるようにした。準備物なども、子ども同士で話し合っ決めてられるように援助した。

子どもの提案を聞きながら、遊びが広がり、遊びこめるように取り組んだが、単純な遊びから、友だちとの関わりや遊びの中で必要な物の提案など、子どもからの提案を待ちすぎるがあった。その後遊びが上手く進まなかったこともあり、保育者がアドバイスして、遊びを広げることが足りなかった。もっと環境設定の展開があったらよかったと思う。また、子ども達で遊びのルールを作っていくように進めたが、もっと主体性が育つように、保育者が提案する前に子ども同士で話し合う、工夫する力、アイディアを出し合う力、遊びが広がるヒントになるように導くことができなかった。

5歳児(ゆり組) テーマ「木」

遊びの中でいつも目にしている木について今年はもっと身近に感じられるようにした。子どもたちが木について興味・関心が持てるよう、園外では名称を伝えながら散策するようにした。木によって幹の太さや感触、葉の形の違いがあることや、季節で変化することなど子どもたちが気づいた事や、疑問に感じた事を言葉で伝え合い共有する事で、次の気付きに繋げたり、数・図形などに関心を持てるよう取り組んだ。また、季節の木を自分たちで選んで写生をしたり、木から採れる葉や枝などの自然物を使った制作、また、木登りなどをして体力向上やバランス感覚に繋がる遊びも取り入れた。

親しみのある桜やどんぐりの木に様々な種類があり名称や違いがあることを知ると、どんな種類があるのか関心を示したり、興味を持った木の名前を図鑑で調べる姿が見られた。保育者の問い掛けをきっかけに散策の度に木が変化の様子を観察する中で、木の太さや数、形にも関心が広がっていった。また、友だちや保育者と意見を出し合う場面が増えると、どのように遊びに取り入れられるかを考えて遊びを提案し、その遊びに挑戦する姿が見られた。

子どもの気付きや疑問を受け止め、問いかけや言葉がけを行うことで、大きさや長さ、形や数への関心が深まるようにした。子ども同士で気づいた事を伝え合えるよう声掛けを行い、木は季節でどのように変化するのかを気づけるようにした。さらに、子どもの「やってみたい」という思いを大切に、保育者も一緒に遊びに参加することで、遊びを展開させたり、興味の薄い子どもも挑戦できるよう援助した。

反省としては1年を通して観察することで、これまで何気なく見ていた木にも様々な種類や違いがあることに気づき、変化に興味深く観察する姿が見られたが、子どもの気付きや関心に大きな差を感じた。散策や発見する姿にも個人差があり、主体的に関わるのが難しい子どもの関心がどこに向いているのかを汲み取ることがより必要だった。その気づきをクラスで共有できるような声掛けや少人数でのやり取りを重ねクラス全体へと繋がるように、もっとしていくべきだった。